

君と出逢って

やたら整った顔のイケメンがいるなあ、と思った。

全員真っ黒な服装をしている中、黒い礼服がひととき吻合している。

今日は、純奈の母の伯父に当たる人のお葬式だ。

親族席に座っているということは、あのイケメンは純奈の親戚ということになる。

でも、あんな人いたっけ？

純奈は隣にいる母にそつと声をかけた。

「お母さん、あれ、誰？ あの、眼鏡かけてて黒いスーツがバシッと決まった、無駄にイケメンな人……美人と美青年の間にいる」

母は見るなり、ああ、という風に頷いた。

「貴嶺君ね。亡くなった伯父さんの息子の子供。新生貴嶺君、あなたの二從兄に当たる人よ。ちなみに、右隣が姉の雪嶺ちゃん、左隣が弟の秋嶺君。初めて会ったかしら？」

母が首を傾げながら言うので、うん、と頷く。

「ハトコ？ えーっと……お母さんの從兄弟の子供、つてことかな？」

「そう。貴嶺君、頭が良くてね、T大卒業して外務省にお勤めしているエリートさんよ」
「……ゲームシヨウ？」

純奈は視線の先のイケメンを見た。

「外交官なんですって。ずっと海外と日本を行き来していて、凄く忙しいらしいの。キャリア、とか言うらしいわよ。この前までは、フランスにいたみたい。詳しいことは知らないけど」

外交官と言えば、なんだかお偉いさんのように聞こえる。

収入も半端なさそうだな、と勝手な想像をしながら貴嶺から目が離せない。

一応、純奈も女なのだ。やっぱりイケメンには目が行くわけで。

でも、純奈の場合はそこまで。

彼氏とか、そういうものは苦手だ。というか、お付き合いも恋愛も今までまったくしたことがない。

男の人が苦手なわけではないが、純奈にとって異性は空想や想像の中だけの存在でいいのだ。

「ふーん。たかね、って変な名前」

「純奈、聞こえるわよ。……まったく、あなたが貴嶺君みたいな男を落としてくれたら、褒めてあげるのにねえ」

母はちくりと嫌みを言う。

つい一ヶ月前、純奈は約五年間のOL生活にピリオドを打った。

二十七歳で無職になり、家でゴロゴロしている純奈は、母に何も言い返せない。

だが貯金は充分にあるし、今のところ、親に金銭的負担はかけていない。だから、別にいいじゃ

んと思う。OL時代はいろいろ疲れることもあったので、せめて一年はゴロゴロしていたい。

「もう、あなた、結婚したほうがいいんじゃないの？」

二言目にはこれだよ、と純奈はうんざりする。年齢も年齢だけに、彼氏やら恋愛やら結婚やら、周りのプレッシャーがきつくなってきた。

「だったら、お見合いでもなんでも持ってきてくれてイケド？」

言葉になって、思わずそう言ってしまった。

「あら、言ったわね？」

「……あー……できれば、専業主婦でもOKな人にしてね。次の就職先なんて、まだ決めてないし。しばらく仕事する気ないから」

とはいえ、自分は結婚なんてしないんじゃないかな、と思う。二十七年間彼氏がいなかったわけだし、もうここまで一人で自由に暮らしてきたのなら、ずっと一人でもいいか、と。

でも、もし結婚するんなら、あんな人がいいな、イケメンだし、と心の中で思う。純奈はハトコだというイケメンに、じつと見入ってしまった。

眼鏡越しに見える目は切れ長だけど、瞳は大きい。鼻筋はスツと通っていて高め。唇の形も魅力的で、女の子が好きそうな整った顔だ。どちらかと言えば綺麗系で、スーツがとても似合う。

まじまじと見つめていたら、そのイケメン貴嶺君と目が合った。

とっさに笑みを浮かべて会釈すると、相手も会釈を返してくれる。にこりともしなかったけど、冷たい感じはしなかった。

なんとなく、感じが良さそう。
それが、初めて会った彼の印象だった。

☆ ★ ☆

お葬式の後、喪主である母の従兄弟から、よかつたらと精進落としの席に誘われて、純奈は母と二人でお付き合いすることになった。

「さあ、座って。やあ、純奈ちゃん、綺麗になったねえ」

純奈は緩く笑って会釈をする。

「いくつになったのかな？」

純奈が母の従兄弟と会ったのは今日が初めて。でも、相手は純奈のことを知っているようだった。もしかしたら小さい頃に会っていたのかもしれないが、とんと覚えていない。

ちなみに母の従兄弟も結構かつこいいオジサマだ。そして、オジサマの奥様も美人。

「二十七、です」

「おお、そうか……貴嶺、純奈ちゃんの隣、空いてるぞ」

え？　と思つて母の従兄弟の視線を辿ると、貴嶺が携帯で電話をしていた。彼の携帯はスマホではなくガラケーで、純奈はいまどき珍しいものを見たような気分になる。

電話を終えた貴嶺が、純奈の隣に座った。

「みなさん、どうぞ召し上がってください」

母の従兄弟が言うと、みんな箸を取った。

純奈も改めて目の前に並べられた料理を見る。まるでコース料理のような豪華さだ。

一口食べた煮物は、文句なく美味い。でも肉料理はさらに絶品だった。噛んだらすぐに切れるくらいトロトロに柔らかい肉は、純奈を感動させた。

「なにこれ、うまっ」

思わず口から出た言葉が聞こえたらしく、隣に座つた貴嶺が口元だけで笑う。

どうせ、庶民。これくらいの言葉しか出てこないもん、と思つた。

そう思っていたら、隣の母が肘をつつく。

「あんた、食べてばかりいないで貴嶺君にビール注ぎなさいよ」

こそそそと言われて、隣のグラスを見ると空だった。

確かに母の言う通りだな、と思つたので、純奈はビール瓶を持ち上げる。

「あの、ビールお注ぎしますね」

純奈が言うと、貴嶺は手でグラスに蓋をする。

「いえ、食べたら仕事に行くので」

仕事？　と思いつながら首を傾げると、母の従兄弟がため息まじりに声を出した。

「貴嶺、お前、また仕事か？　今日はじいさんの葬式だったんだぞ？」

「わかつてるけど、他にロシア語ができる人がいないらしくてね」

「この前も、帰ってきたと思っただけ、って感じだったじゃないか……」
「仕事だから」

「今度はどこだ？」

「ウズベキスタン」

純奈はビール瓶を持ったまま、パチパチ、と瞬きをする。

ウズベキスタンってどこ？ しかもロシア語ができる、とか言っていた。

なんだか純奈とは次元の違う話をしていて、これは確かにエリートだわ、と思う。

「ビール、冷たくないですか？」

ぼーっと話を聞いていると、隣からそう声をかけられた。

「は？ ……つあああ！ 置きます」

純奈はビール瓶をテーブルに置いた。すると代わりに貴嶺がそれを持ち上げ、こちらを見る。

「あなたは？ ビールを飲みますか？」

「えっ？ ああ、ああ、はい、いただきます」

イケメンがにこりと笑うと、めっちゃ威力がある。内心ドキドキしながら、純奈はグラスを傾けた。ビールを注がれる間も視線が顔にいつてしまう。

「コップ、元に戻してください」

「え、ああ！ すみませんっ！」

慌てて傾けたグラスを元に戻す。我ながら、さつきから挙動不審だな。

すると母が貴嶺に、ごめんなさいねえ、と声をかけた。

「もう、気が利かないし、ぼーっとしてる娘で……」

母からバシんと肩を叩かれる。痛いよ、と思いつつながらビールを一口飲んだ。

イケメンにお酌してもらったら、普通、緊張するだろう。

「いえ」

貴嶺は、母に一言そう答えると、箸を取って食事を始める。

見るともなしに見ていると、煮物の椎茸を微妙によけているのに気が付いた。自分の煮物を見る
と人参ばかりが残っている。

純奈は、こっそり隣の貴嶺に話しかけた。

「私、椎茸が好きなんですよね。でも人参は嫌いで」

純奈は椎茸が好物。大きな椎茸を焼いて醤油をかけて食べるのが好きだ。

「……食べます？」

一瞬、驚いたような顔をした貴嶺は、そう言っただけの皿を差し出す。

「いいんですか？」

「……どうぞ。俺、人参食べましょうか」

「き、嫌いじゃないですか？」

「人参は好きでも嫌いでもありません」

じゃあ、と純奈は貴嶺の皿から椎茸を取る。代わりに、貴嶺は純奈の皿から人参を取った。

「何やってるんだ？ 二人とも」

貴嶺の父がそう言ったので、純奈はピタッと箸を止める。

「互いに嫌いなものを交換してるだけ」

貴嶺がさらりと言うと、父親が笑った。

「まるで勝手知ったる夫婦みたいなのをするなあ」

フウフ!?

箸を持ったまま固まった純奈は、顔が熱くなるのを感じた。

「す、すみません！」

「……何か謝ることも？」

貴嶺は涼しい顔でそう言った。彼はなんとも思っていないらしいが、純奈はどうにもいたたまれない。

「お互い独身だし、純奈ちゃん、貴嶺なんかどうだい？」

こんなイケメンなのに、まだ結婚していないのか。

でも、こういう人には、きっと彼女がいると思う。というか、いないほうがおかしい。

「純奈さんに迷惑だよ、お父さん」

当たり前障りなく流してしまうのが、上手いなあと感じた。無表情ではないが、淡々とした感じ。

あまり物事に動じないタイプかもしれない。

貴嶺は落ち着いて見えるし、純奈より一歳か二歳くらい年上だろう。落ち着いて見えるのは、眼鏡のせいもあるだろうが。

一応、形だけ迷惑ってところを否定しておこうと、純奈は貴嶺を見て首を振る。

「そんなことないですよ……あはは」

「純奈ちゃん、悪い気しないのかあ。だったら、貴嶺、結婚してもらえよ」

純奈は内心ないと首を振った。貴嶺とはいえ、まるで意にも介していないように、平然と返事をする。

「はいはい」

なんとというか、親戚同士の集まりで結婚していない男女がいると、こういう話の流れになるのだからと実感した。

若干の面倒くささを感じながら、純奈はビールをゴクゴク飲んで、美味しい料理を食べる。

「細いのに、いい食べっぶりですね」

そう声をかけられて、純奈は隣へ視線を向ける。

「美味しいです。きつといい仕出しなんでしょよね」

料理を口いっぱい頬張りながら言うと、貴嶺は小さく笑った。

「普通です」

あつさり言われて、ああ、そう、と思う。イケメンだけど、基本、素っ気ない感じだ。

貴嶺はちらりと腕時計を見ると、持っていた箸を置いた。そして黒い縁の眼鏡のブリッジを押し上げて、一つ瞬きをする。

その眼鏡を押し上げる仕草は、いかにもエリートっぽい感じがした。しかも、眼鏡のテンプルに

は芸能人御用達のブランド名が刻まれている。

結構なお値段のしそうな眼鏡フレーム。この手のシンプルでスタイリッシュな眼鏡フレームは、顔が小さい人のほうが似合う気がする。貴嶺は顔が小さく綺麗系なので、かなり似合っていた。

こんなイケメン、女が放つて置くわけがない。しかも国家公務員だ。

絶対に、純奈と、なんてことはないだろう。

「俺、失礼します。すみません、中座して」

貴嶺はそう言うて立ち上がる。思ったより背が高い。見上げるほどの長身、というのはこういう人のことを言うのだろう。しかし、座っている時はそんなに高いようには思わなかったが……

座高が低い、イコール足が長い。

思わず足元からウエストまで確認すると、ビックリするほど足が長かった。

「うっそ……」

純奈のつぶやきが聞こえたららしい貴嶺は首を傾げた。だが、すぐに気を取り直したのか、椅子の横に置いてあったブリーフケースを手を持つ。

その時、先ほど貴嶺の姉だと教えてもらった雪嶺も席から立ち上がった。

「あ、じゃあ私も帰ります」

「雪嶺！」

貴嶺たちの母親が窘めるように声を上げると、ごめんなさい、と少し高めの綺麗な声がそう言った。美人は声まで綺麗らしい。もちろん貴嶺もイケメンらしく、低い美声だ。

新生貴嶺。

「実は、旦那が熱出して寝込んでるの。子供も一緒にダウン中。早く帰ってあげないと……ごめんね、お母さん」

家族が二人も熱を出しているなら、大変だろう。

「貴嶺、私も一緒にタクシー乗るから！」

そう言うて小走りに出て行く雪嶺はスタイルのいい美人だ。とても子持ちには見えない。

ふと、貴嶺の皿を見ると半分くらい残っている。でも、純奈の人参だけはしっかり食べてくれた。思わず出て行く貴嶺の後姿を目で追う。

新生貴嶺。

イケメンで、学歴も職業もハイレベルで、背が高くて、足も長い。一昔前なら、三高と言うのだろう。いまだきあんな人もいるんだなと思った。

淡々としてはいたけれど、なんとなく優しい人な気がした。人参も食べてくれたし、と心の中でつぶやく。

思わず、じっと見つめていたくなる人。

純奈がここまで男の人のことを思うのは、生まれて初めてのことだった。

☆ ★ ☆

それから数日後、純奈は中学の同窓会に来ていた。

会場の隅でビールを飲みながら、周囲を眺める。

この年になると、さすがにお母さん、お父さんになっていている人も多い。中には子供連れで来ている人もいた。

早生まれの純奈は二十七歳になったばかりだが、同級生のほとんどは今年二十八歳になる。その同級生が五歳くらいの子供を連れているのを見ると、いくつで結婚したんだ、と目を丸くしてしまう。つくづく、時の流れは早いもんだと思つた。

そういえば先月、退職する時にも寿退社じゆたいしゃかと聞かれたつけ。

〇L時代、純奈はそこそこ、いや結構仕事ができた。

苦勞して一流企業と言われる会社に入って、バリバリ仕事をしていた。女性の多い職場では、純奈以外にも独身の女性が多かった。

純奈は基本、年上とも年下とも仲良くするのがモットーなので、結構上手うまく立ち回っていたと思う。でもある日、それがとても面倒になってしまった。みんなにいい顔をして、ニコニコしている自分が嫌になった。

だから二十五歳の時、お金を貯めるだけ貯めて会社を退職しようと思つた。

そして一ヶ月前、ついにそれを実行したのだ。もちろん上司にも同僚にも引き留められた。引き継ぎをどうすればいいんですか、と泣きついてくる後輩もいた。でも、その辺はきつちりやって行くのが純奈の心意気。

すべての引き継ぎを終え、めでたく退職と相成あひなつた。

そんなことを思い出しながら黙々とビールを飲んでみると、隣に座っていた男友達が笑つた。

「純奈、相変わらずイイ飲みっぷり」

彼、松尾隆介は中学時代から仲のいい友人だ。もう一人仲のいい女友達と三人で、よくバカをやったり、遊びに行ったりした。今日、その女友達は仕事で来られないらしい。

お互い社会人になると忙しくなり、ほとんど会う機会がなかった。

「そんなに強くないけどね。隆介は、そろそろ帰らないでいいの？」

隆介が結婚したのは知っているが、奥さんにはまだ会ったことがない。

「うん。今日は嫁さんも遊びに行つてるから」

隆介はにこーつと笑う。そして、これから別の場所で飲まないかと純奈を誘つた。

「え？ どこに？」

「行きつけの店。こうして会うのは久しぶりだから、ちゃんと話したいじゃん」

「それもそうだね、行こうか」

「あ、でも純奈、明日は仕事、大丈夫？」

「大丈夫、だって今無職だし」

「は？ 無職!？」

隆介が驚くのは当然だろう。この間まで普通に働いていたし、辞めたことを彼に言うのは初めてだ。だが、隆介のいいところは深く聞いてこないところ。話したくなったら話せよ、という感じである。驚いていたけど、今日もいつも通り「そっか」で済ませてくれた。

二人で同窓会の会場を出ると、純奈はタクシーへ押し込まれる。

「え、どこまで行くの？」

「霞ヶ関の近く？ 実は、そこで約束してるんだ。同じ職場の上司のような人なだけど……まあ、とにかく、一緒に飲もうよ」

「ええっ!？」

知らない人と飲むなんて聞いてないよ。それに、職場の上司なら、きつと男の人だろう。

「まさか紹介したい人、とか言わないでよ？ 私そういうの興味ないって知ってるよね？」

純奈が警戒していると、隆介はカラッと笑った。

「知ってるって！ 全然、紹介とかじゃないから」

「私を結婚させようとか、思っていない？」

以前から隆介は、結婚には興味がない純奈に、「そんなの、この先はわからないよ」とよく言っていたのだ。でも、今日は違うようだ。

「っていうか、もったいない」

「は？」

「これから会う人は、純奈にはもったいないってこと」

なんじゃそりゃ、と心の中で突っ込む。

「エリート官僚だったのに、上司の娘との結婚話を蹴って、ウチの部署に飛ばされて来たっていう噂なんだけど、掃き溜めに鶴って感じ。性格いいし、仕事はできるし、七ヶ国語を流暢に話せて、

しかも超絶イケメン」

イケメンをかなり強調したあたり、本当にそうなのだろう。隆介もルックスは悪くない。むしろ、カッコイイほうだと思う。そんな隆介が、「超絶イケメン」と言うのだから、よっぽどだ。

「とにかく尊敬できるんだよね。俺より年上で大人なのに、凄くフランクに接してくれて、その人と話していると勉強になるっていうか」

エリート官僚で、七ヶ国語を流暢に話せる、超絶イケメン。

それを聞いただけで、なんだか会いたくない。そういう人は、だいたい高学歴でプライドが高く、自分を特別だと思っている人だと思う。純奈なんか相手にしないだろう。

純奈は、普通。

人より特別優れているようなものは何もない。容姿も十人並みだ。

気が重いなあと思っていると、隆介はニコニコしながら言った。

「ただ、久しぶりに会ったんだし、純奈ともっと飲みたいだろ。だから、三人一緒に飲もう。楽しいよ、きつと」

大らかで、単純で、誰からも好かれる隆介らしい考えだった。

「ウチの部署忙しいのに、その人、嫌な顔ひとつせず仕事するような良い人なんだよ。あ、俺、一応、外務省勤務なんだけど」

「ガイムシヨウ？」

隆介が公務員なのは知っていたが、外務省勤務だったとは知らなかった。いつ電話しても、忙し

くて会う暇が、と言っていたような気がする。

「うん、まあ、ノンキャリアだけだな。これから会う人は総合職試験パスした、キャリアなんだぜ。今朝、ウズベキスタンから帰国したところを、無理言って誘ったんだ」

ウズベキスタンってどこ？

「そういえば最近、その国名をどこかで聞いた気がする。」

「私、あんまりお金持ってきてないよ？」

純奈は、同窓会の会費、プラス五千円くらいしか持ってきていなかった。今は無職なので、できれば出費は抑えたい。

「俺が奢る。そのつもりで誘ってるし……ほら、着いた。降りて、降りて」

そうしてタクシーから押し出された。タクシー代も隆介が払ってくれる。知らない人と飲むのはやっぱり気が進まないが、奢ってもらえるならまあいいか、と目の前の店を眺める。

そこにはどう見ても高そうなバーがあった。バーなんて初めて来たよと思いつながら、迷いなくドアを押す隆介について行く。店の中にはカウンターしかなくて、ぱつと見る限り客は一人しかいなかった。

「新生さん、先にいらしてたんですね。待たせてすみません」

ニイオさん、という言葉聞いて隆介の後ろから顔を出した純奈は、思わず目を見開いてしまった。相手も驚いたような顔をしていたが、にっこりと笑う。

「お疲れ様。中学時代の友達？」

「そうです。友達の高橋純奈。サッパリしたいいやつなんですよ」

「そう」

貴嶺は純奈に視線を移すと、一息を吐いて瞬きをする。そうして隣の椅子を引いて、どうぞと言った。

「先日はどうも、純奈さん」

隆介は驚いたように、えっ？ と大きな声を出した。

「新生さん、純奈と知り合いなんですか？」

「二、従妹らしくてね。この前、祖父の葬式で初めて会ったんだ」

そう隆介に向かって言うと、貴嶺は純奈に視線を戻す。その目は切れ長で、瞳が大きくて、綺麗な形。

「えっ!? はどこ？」

隆介は、貴嶺と純奈を見比べている。

外交官で、何ヶ国語も話せて、エリートで、超絶イケメン。そして性格もいい。

純奈は、さっきタクシーの中で隆介が言っていたことを思い出し、今さらながらに納得した。確かにそれは、葬式で会った新生貴嶺そのものだ。

しかし……まさか、こんなに世界が狭いとは思わなかった。

「ど、どうも」

「お互い、驚きましたね」

彼は口元だけで笑い、おだやかに言う。

「純奈、とりあえず座れよ。新生さん、椅子引いてくれてるだろ？」

隆介から言われ、まだ椅子の背に置かれたままの貴嶺の手を見る。大きいが、綺麗な手だ。爪の形まで美しい。

貴嶺の顔を見ると、こちらをじつと見ていて、純奈は瞬きを繰り返した。

「あ、あり、ありがとうございます」
純奈はてつきり、貴嶺の隣に隆介が座り、隆介の隣に純奈が座るのだと考えていた。
この席順はまったくの想定外。

とはいえ、このまま立っているわけにもいかず、貴嶺が引いてくれた椅子に座ろうとした。だが、シオルダーバッグが邪魔をして上手く座れない。

すると、貴嶺がさりげなくバッグの下を持ち上げてくれた。おかげで純奈は、スムーズに座ることができた。

持ち上げていたバッグを純奈の膝の上にスツと置いたその仕草は、凄く手慣れている気がして、今度は純奈が貴嶺をじつと見てしまう。

「どうかしましたか？」

「いいえ……」

純奈がヘラツと笑っていると、貴嶺の反対隣の席に隆介が座った。

隆介！ 遠いよ！ と、心の中で叫ぶが、純奈の前にはすぐにコースターが置かれ、おしぼりを渡されてしまった。

いい年をしてバーなんてものに来たことがない純奈は、これからどうしていいのかわからない。今まで、居酒屋でしか飲んでこなかった自分を呪った。

棚にはオシャレな酒瓶がずらりと並んでいるけど、飲んだことのないものばかり。知識では知っているお酒もあったが、大人な味がしそうで、とても飲める気がしない。

「俺、新生さんと同じものにしようかな」

隆介がバーのマスターにそう言った。えーっ!? と思いつつながら隆介に視線をやり、助けて合図を送るが、まるで気付いてくれない。

「スコッチですが、どのようにお飲みになりますか？」

「新生さんと同じストレートで。あと、スープとガーリックトーストを」

はい、と返事をしたバーのマスターが、今度は純奈に顔を向ける。

「何になさいますか？」

「えっ……？」

スクリュードライバー？ モスコミュール？ ってカクテルの名前で合ってたかな？ と心の中であつぷりながら視線をさまよわせると、隣に座る貴嶺が笑った気配がした。

隣を見ると、口元に拳を当てた貴嶺が純奈を見ている。

なんだろうと首を傾げると、すぐに視線を外された。

「彼女に何かブルーのカクテルをお願いします、マスター」

貴嶺がそう言って、マスターに純奈の飲み物をオーダーしてくれる。ブルーって、青い色のカク

テルってこと？」

「承知しました。スープとガーリックトーストはいかがいたしますか？」

「あ、ください」

貴嶺の頼んだカクテルが気になったが、まだ少しお腹が空いていた純奈は純奈は思わず頷いてしまった。

「どうしてブルーのカクテルなんですか？」

ちよほど隆介が貴嶺に尋ねるのを聞いて、次の言葉に耳を澄ませる。

「ああ、ピアスが……透明で青い石だし」

そう言つて、貴嶺は純奈の肩にかかった髪の間を指さす。その際、貴嶺の長い指が軽く髪に触れた。

途端に耳が熱くなってくる。純奈は思わずちよつとだけ身体を引いて、彼と距離を取った。

「バッグもブルーだからね」

今日の純奈は服を黒つぽくまとめ、ブルートパースのピアスとブルーのバッグをアクセントにしていた。純奈のことをよく見ているような貴嶺の発言に、落ち着かない気分を味わう。

ほどなくして目の前に置かれたのは、ロンググラスに入ったカクテルだった。グラスの下の方がほんの少し白くなった、あざやかなブルーのお酒。

「キレイイ！ わあ……」

その時口元に笑みを浮かべた貴嶺とバツチリ目が合ってしまった。慌てて視線を逸らす。内心の

動揺を誤魔化すように、純奈はグラスにさしてあるマドラーでカクテルを混ぜると、ゴクゴク飲んだ。

「美味しい……ラムネ味みたい……」

「よかったです。似合いますよ、そのカクテル」

カクテルが似合うなんて、言われたことない。なんというか、男の人に面と向かってそんなセリフを言われるなんて、純奈の今までの人生ではあり得ないことだった。

仕事帰りだからか、今日の貴嶺はバシツと決まったスーツ姿。細身のスーツをこんなにもかつこよく着られる人は、なかなかいないと思う。

「純奈、新生さんがイケメンだから気後れしてんのか？」

「そ、そうよ！」

当たり前だよ、緊張するもん！ と、隆介が隣にいたら言うところだが、その言葉をぐつと我慢した。何より、ほぼ初対面の貴嶺に悪印象は残したくない。

純奈も女なので、やはりそこは気にするのだ。

どうにも居心地が悪くなった純奈は、残りのカクテルを一気に飲み干した。

「美味しいー！」

いい気分になった純奈は、バーのマスターが出してくれたスープとガーリックトーストも食べる。そうしたら、いつの間にか貴嶺がこちらを見ていた。

「パン屑、ついてますよ」

貴嶺が自分の口元を指さして教えてくれる。

慌てて教えてもらった場所をこすると、違うという表情をされた。

「ここですよ」

貴嶺はなんの躊躇いもなく純奈の手を取り、パン屑のもとへ導く。

「ああ、取れました」

こんな風に異性に手を握られたことのない純奈は、思わず手をバツと離れた。

「あ、ありがとうございます。お酒も美味しいです！」

「よかったです」

純奈は取り繕うような笑みを浮かべた。

「お葬式のすぐ後からお仕事で、大変でしたよね？ お疲れでしょう？」

とりあえず、当たり障りのない会話を、と思ったがこんな言葉しか出てこなかった。まあ、でも、会社に勤めていた時から男性に対してはこんな感じだった。男性社員とは仕事の話しかしなかったので、気の利いた会話などまるでできない。

「いえ、仕事は、すぐ済みましたから」

そう言って琥珀色のお酒を美味しそうに飲む貴嶺は、凄く大人な感じだ。その琥珀色の液体はそんなに美味しいのだろうか？ と興味がわく。

「お仕事できるんですね、隆介の言った通り」

「いえ、そんなことはありません」

純奈は貴嶺に相槌を打ちながら、ちつとも会話が弾まないあとと思った。

その時、隆介が会話に入ってきて、ほっとする。

「新生さん、仕事できるじゃないですか」

「ただこなしているだけだから」

「そうやって、こなせるのが凄いですよ。俺、尊敬してますよ！」

貴嶺は隆介の言葉にただ微笑んで、琥珀の液体を飲み干した。

彼は純奈のグラスが空なのに気付いたらしく、綺麗な目を純奈に向けてくる。

「何か飲みます？」

「え？ あ、いえ！ さっき一気に飲んだので、もう少しいいです」

「そうですか」

「新生さんは？ 何か飲まれないんですか？」

「そうですね……じゃあ、ウイスキーで」

棚を軽くざっと見回して、貴嶺の目が一つの瓶に留まる。

「エドラダワーをストレートでください」

貴嶺はウイスキーに詳しいのだろうか。

水も氷も入れずストレートで飲むのを見て、そんなに美味しいのかな？ と思わず見てしまう。

「どうしました？」

視線に気付いたのだろうか、彼は不思議そうに尋ねてくる。純奈は、少し迷ってから答える。

「いえ、それ美味しいのかな、って。ウイスキーは飲んだことがないので」

「ああ……じゃあ、次は……」

ウイスキーを頼んでくれそうだったので、首を横に振った。

「いえ、ちょっとでいいんです……味見してみたいな、って思っただけですし」

貴嶺の手にあるウイスキーをじつと見ていると、貴嶺の視線もグラスに移る。

「これ、ですか？」

「はい……。あの、ダメですか？」

ほぼ初対面の男の人。いきなりそんなことを頼んだ自分が恥ずかしくなるが、別に親戚だからいいか、と思い直す。

「どうぞ」

差し出されたグラスを受け取って香りを嗅ぐと、なんだか甘くていい香りがした。

だから躊躇いもなく、ゴクッと一口飲む。

「うあ……っ！」

だが、初めて飲んだウイスキーは舌も喉も焼けそうな味だった。

思わず舌を出して、声を上げてしまうほど。

「ばっかだなあ、純奈。いきなり飲むからだよ。マスター水ください」

すかさず水を頼んでくれた隆介に感謝したいが、感謝の言葉よりも、まずは水だった。受け取った水を、一気にゴクゴク飲んでしまう。

「ありがとう、隆介」

隆介に礼を言うと、はあ、とため息をつかれた。

「純奈、甘い酒好きじゃん。急にどうした？ ウイスキー飲みたいなんて」

「え？ だって、新生さんが、美味しそうに飲んでるから……」

純奈が貴嶺を見上げると、彼は眼鏡の奥の目を瞬かせて、口元に笑みを浮かべた。

「ウイスキーは、ゆっくり飲むのが美味しいんです」

そうなんだ、と思いつつ、純奈は息を吐く。その時、鼻から抜ける芳しい香りに気付いた。

「あ、でも、なんか凄く甘い匂い、っていうか……後味が、いい感じ？」

「ウイスキーは、そういうところを楽しみます」

貴嶺はほとんど表情を変えないけれど、彼の持つ雰囲気や優しい口調に、心臓がドキドキ鳴り出す。

それを紛らわせようと視線を落とすと、貴嶺のグラスに純奈の口紅がついているのが見えた。

「す、すみません、グラスに口紅がつ！」

慌ててグラスの縁についた口紅を指で拭いてから、これって逆に汚いかもしれないとさらに焦る。

やってしまった、と思いつつながら貴嶺に頭を下げた。

「あ、や、あの、すみませんっ！」

「……いえ」

返事がやや遅れたのは、きっと不快だったからに違いない。

イケメン相手にテンパって失敗。

焦りと羞恥で無駄に暑くなり、顔も火照ってきた。急激に酔いが回った感じだ。

これはきつとさっきのウイスキーのせいだと思いがら、はあ、と息をついて下を向く。すると、グラツと目の前が揺れた。

そして傾いた身体が、隣の貴嶺に当たってしまった。

「ず、すみません」

いったい自分は、何度貴嶺に謝っているのか。

これは強い酒を飲んだせいに違いない。前髪を直しながら、落ち着け、と自分に言い聞かせる。

「大丈夫ですか？ 顔が赤い」

貴嶺の綺麗な指が純奈の頬をかすめた。

そんなことされたら、ますます落ち着けない。

「あの、ちよつと、トイレに行ってください」

バッグを持ち上げて席を立つ。

トイレへ行き、とりあえず用を済ませた純奈は洗面台で手を洗った。

鏡に映った顔を見ると、顔がほんのり赤くなっている。それほど酒には弱くないのに、と思いがら、先ほどのことを思い出した。

「……何やってんだらう私……。でもあの人、私を女扱いしすぎていうか。いや、確かに女だけどぎ。もう、あんなイケメン、心臓に悪いよ……」

顔が熱いのは、酒だけでなくたぶん貴嶺のせいもあるだろう。男に免疫がない純奈には、彼の何気ない言動がいちいち大きな刺激になる。

「はあ……」

ため息をついた純奈は、鏡に映る自分の唇を見て、色が落ちていることに気付いた。お気に入り、お気に入りのストロベリーピンクの口紅を塗り直し、よし、と思つてトイレの外へ出た。

が、一歩踏み出した途端ちよつとだけフラツとしてドアに背中を預ける。

「純奈さん？」

低い艶のある声が聞こえて顔を上げると、そこに貴嶺がいた。

「あ、に、新生さん!？」

なんでいるの!? と瞬きをして貴嶺を見る。

しかし慌てて姿勢を立て直すと、パンプスのヒールが横滑りして体勢を崩してしまう。

「わあっ!？」

「純奈さん!」

こける、と思つた瞬間、貴嶺に抱き留められていた。

この状況、どうしよう!? 混乱して頭の中がぐるぐる回り始める。さきほどウイスキーを飲んだことも影響しているのか、顔が熱くなってきた。

彼の微かな吐息が耳にかかる。ドキドキして、さらに耳まで熱くなる。純奈はギョツと目を閉じた。すると、今度は首筋に吐息を感じる。なんだか唇が当たっているような感触がして、ドキドキが

限界に達した。

「す、すみません！」

なんとか体勢を整えて身体を離すと、貴嶺がじつと純奈を見下ろしていた。

「……いえ、大丈夫ですか？」

落ち着いた、冷静な低い声。さつきと変わらない表情。

貴嶺はただ、こけた純奈を抱き留めてくれただけだ。なのに、私ときたら何を意識しているんだ、と心の中で叫ぶ。

「はっ！ はい！ だ、大丈夫、です」

「なかなか戻ってこないから、心配しました」

心配して迎えに来てくれたのか。それなのに、また迷惑をかけてしまった、と純奈は自分を責める。

「マスターが水を用意してくれています。戻りましょう」

「は、はい」

「足は、平気ですか？」

「大丈夫です！」

彼はさりげなく身体を支えるように、肩に手を回してきた。さつき転びかけたため、心配してくれているのだろう。しかし、この体勢は、純奈にとつてドキドキ以外の何物でもない。

「だ、大丈夫、ですから」

ぱつと貴嶺から離れ、一人できちんと歩いて席に戻る。

純奈は、席に用意してあった水を一気に飲んで、ほつと一息ついた。

冷静になれば、首に唇が当たるなんてこと、あるわけないとわかる。自分はなんてエロいことを考えているんだろうと赤くなった。

相当、自分が恥ずかしい。イケメンの前に、何を夢見ているんだか。

純奈は水をお代わりして、再び一気に飲んだ。

「あの、隆介、えっと、酔ったみたいだから帰るね！ あの、新生さんも、すみませんでした！」
純奈はバッグから財布を取り出し、とりあえず三千円置いた。隆介は奢おごってくれと言ったが、もうそんなものはどうでもいい。

「え、おい、純奈？」

「帰らないと、親が心配するし！ ごめんね、なんか」

そうして焦って店のドアを出ようとしたら、躓すくいてしまった。どうにか転ばずに済んで、店の外に出る。そこで大きく深呼吸して、純奈はほつと息を吐いた。

「もう、なに、あれ……めっちゃ優しいし、女慣れしてるし」

あれじゃ、誰だっけ勘違いするよ……

「なんて心臓に悪い人なんだ。本当に」

赤くなった顔に手を当てながら、純奈はタクシーを探してとぼとぼ歩く。

楽しく酒を飲むどころか、貴嶺が隣にいたことでひどく緊張してしまった。

二十七年間、一度も会わなかった親戚だというのに、偶然とはいえ、こんな短期間に二度も会う

なんて、不思議なものだ。

——そして、二度あることは三度あるという。純奈は、まさかそれが自分に起こるとは思っていなかった。

☆ ★ ☆

「もう、やる気ないのはわかるけど、背筋伸ばしなさい！ やっぱり着物のほうがよかったかしらね」今日の純奈は、綺麗なベージュのワンピースに、黒のパンプス。髪の毛を軽くセットして、コップンパールのピアスをつけている。

母から背を叩かれて、純奈はため息をつきつつ肩を落とした。ここは高級ホテルのレストラン。フレンチがとても評判で、テレビで紹介されたこともある。が、目の前にはフレンチではなく、アフタヌーンティーなるものが運ばれてきた。

今、純奈はお見合い相手を待っている。

というのも、母が突然、見合い相手を見繕ってきたのだ。

『ゴロゴロゴロゴロ、ゴロゴロして！ そんなに毎日ゴロゴロしてるんなら、見合いでもしなさい！』と、母の雷が落ち、尻を引つ叩かれてこの場にいる。

しかしゴロゴロと言うが、純奈なりにちゃんと家事の手伝いもしている。時にはご飯だって作っているじゃないか。なら、それ以外の時間をぼーっと過ごして何が悪いんだろう。もともと、そう

したくて仕事を辞めたというのに。

もちろん、母が娘の行く末を心配してくれていることはわかる。

かといって、見合いをしると言った二日後にもう見合いだなんて。

そうして今、相手を待つこと二十分。

待ちくたびれてため息をつく、母が遅いわねと言った。これから会う相手はずいぶんと忙しいらしく、母が見合い話を持ちかけた二日後しか、予定が空いていなかったらしい。

「本当に忙しいのね。遅れると思います、って事前に連絡あったもの」

「それ、どうなの？」

「仕方ないでしょ……ああ、お母さんだけ先にいらっしやっただようね」

えー、と思つて母の視線の先を見ると、見覚えのある人が小走りにやってくる。

「ごめんなさいねえ、秋絵さん！ もうすぐ、もうすぐここに来るわ。どうも、道が混んでいるみたいなの。成田にいるのかと思つたら、あの子、普通に外で仕事をしてみたいみたいで」

「こちらこそ、ごめんなさいね。いきなりの話で急がせちゃって」

「いいのよ、こうでもしないとあの子、結婚しないからあ」

母と話しながら、ほほほ、と笑うその人は、この前のお葬式で会った新生家の奥様である。

これは、つまり……

「もしかして、お見合いの相手は、貴嶺さん？」

貴嶺さん、と呼ぶのは面映ゆいが、ご両親も新生なので苗字では呼べない。

そして、純奈の勘は当たったらしい。
母は、ニコツと笑ってこちらを見る。

「そうよ！ お葬式の時、意気投合してたじゃない！ 貴嶺君も三十四歳になるのにまだ独身だつていうし、純奈よりちよつと年上だけど、そんなの大した問題じゃないと思うのよね。だから、結婚前提ってことでこのお見合いをセッティングしたの」

母が言うと、貴嶺の母も乗り気で頷く。

えっ、結婚前提!? そんなの聞いてないよ！ と純奈は心の中で驚いた。

それに、高嶺は一つか二つくらい上だと思っていたら、結構年が離れている。貴嶺の外見を思い出して、若いなあと感じた。

「本当に忙しい子で……外交官って、婚期が早いか遅いかのどちらかみたいなのよ。この前、普段無口なあの子が、純奈さんと凄く喋ってたじゃない？ きつと、あの子もあなたのこと気に入ったんだと思うの」

ふふふ、と口元を隠して笑う貴嶺の母。

確かに口数は少ない人のような気はした。でも、ちよつと話していただけで意気投合したと思うのは、正直どうかと思う。

あんなにスベックの高いイケメンが、純奈のようなフツの女を気に入ることなんてないだろう。初めからあまり乗り気じゃなかったこの見合いに対して、ますますやる気をなくし、断ろうと心から思った。

そうしてふと横を見ると、足早にこちらへ向かってくるスーツ姿の男性。

髪の毛を軽く直しながら近くまで来た相手は、純奈に気付いて目を丸くした。

きつと彼も、見合いの相手を知らされていなかったのだろう。

「純奈、さん？」

貴嶺は驚いたように純奈の名を呼ぶと、下を向いて小さく笑う。

そして椅子に座った彼は、純奈をまっすぐ見て言った。

「二度あることは三度あるというのは本当ですね。三度目は、もう、縁でしょうか？」

貴嶺の母は、首を傾げている。純奈の母も同じだ。

二度あることは三度ある。

一度目はお葬式。お互いほんの少し言葉を交わしただけ。

二度目は友人に連れて行かれたバー。そこでは、もう少しだけ言葉を交わした。

そして三度目は今日。結婚前提でセッティングされたお見合いの相手として会っている。

貴嶺が言うように、本当に、この出会いは縁なのだろうか。私が、この人と……

「……結婚？」

貴嶺は首を傾げて、にこりともせず言った。

「そのつもりですか？」

「えっ？」

「純奈さんは、結婚前提で、この場にいるんですか？」

知らずに、考えていたことが口から出ていたらしい。

純奈は忙しなく瞬きをしながら、思わず膝の上でスカートを握った。どうしよう、と思う。

貴嶺のように、安定した職業についているうえ超絶イケメンとくれば、結婚相手としてこれほど優良な物件はないだろう。

普通はそう考えると思う。結婚に望むのは収入の面での安定だ、と会社の先輩も言っていた。国家公務員なら、そのあたりはばっちりだろう。まあ、人を物件呼ばわりするのはよくないとは思いますが、しかし。

いきなり降ってわいた結婚という話に、純奈はどうしていいかわからない。

とりあえず顔を上げて貴嶺を見ると、綺麗な顔がまっすぐ純奈を見ている。

純奈が、貴嶺と結婚する。そんなこと、まったく考えられない。

だいたい、まず結婚って何をすればいいんだろう。一緒に住んで一緒にご飯を食べて、それから毎日一緒にいて、仕事へ行くのを見送って？

しかし、いや、しかし。

結婚なんかしたら、ベッドでスッポンポンの刑に処せられるじゃないか。

スッポンポンの刑は無理だ。純奈はこれまで誰とも付き合ったことがない。中学時代のフオークダンス以来、男子から手を握られたことすらない。当然キスをしたこともなければ、それ以上先だって。

純奈もいい大人なので、エッチに対する知識がまったくないわけじゃないけれど、よっぽど好き

な相手じゃないと、スッポンポンになんてなれないと思う。

でも、両家の母親が同席している前で、今なんと答えればいいのかだろうか。

ほんの少しの間にいっぱい考えた挙句、テンパっておかしなことを言ってしまった。

「だ、だ、大事に、してくれる、なら……」

きつと貴嶺は引いているだろう。もう、ここは笑って誤魔化すしかない。そう思っていると……

「それは簡単にお約束できませんが」

その端的な返事に、高揚していた気持ちが一瞬で冷めていく。

でも、簡単に約束できないというのは、ある意味、誠実かもしれない。

だが、貴嶺の母はそうは思わなかったらしく、彼の肩をバシンと叩いた。

「あなた、純奈さんになんてこと言うの！ 失礼でしょ！」

というか、このまま断ってくれて構わないんだけど、と心の中でつぶやく。

彼は純奈の手には負えない。第一、こんなイケメンに相手がいないわけがないんだし、おそろく無理やり見合いに引っ張り出されたのだろう。

「や……いえ、大丈夫なので……」

純奈がそう言うと、貴嶺は口を開いた。

「あの、あなたを大事にできるかどうかは簡単に約束できませんが、あなたとの縁は大事にしたいと思います」

「へっっっ」

純奈は、ぽかんと口を開けたまま貴嶺を見る。

今、エンをだいに、と聞こえたような気がする。

エンをだいに、というのは縁を大事に、ということだろうか。

思わず瞬きをして、目を泳がせた。えっと、つまり、と心の中でつぶやく。

「つまりは、あのう……？」

首を傾げて混乱のあまりヘラツと笑うと、貴嶺は目の前で紅茶を一口飲んだ。それから純奈をまっすぐ見て、口元に笑みを浮かべる。その笑みから、純奈は目が離せなくなってしまった。自然と鼓動が高鳴っていく。

「結婚を考えるには、良い縁かと」

その笑顔は罪だ。そんな笑みを向けられたら、誰だって惚れるでしょ！

「あ、あの……ほ、本当、ですか？」

呆気にとられてポカーンとしながら、頭の中は大混乱だ。

この人が、私と結婚？ どうしたって戸惑ってしまう。

でも気付けば、純奈は自然と笑みを浮かべていた。

2

——彼女との最初の出会いは、祖父の葬式だった。

父の従姉妹の娘、貴嶺からすると二従妹に当たる高橋純奈。

丸い大きな目が印象的な可愛い人。純粹にそう感じた。

綺麗な肌と、控えめなピンクベージュの口紅を塗った、ぼつりとした唇に好印象を持つ。瞬きをすると大きな目が際立ち、気付けばつい彼女を目で追ってしまっていた。

葬式の後、親戚が集まる精進落としの席で、貴嶺は父の一言により純奈の隣に座ることになった。

「なにこれ、うまつ」

小さな声が聞こえて隣を見ると、純奈がリスのように口いっぱい料理を頬張って、忙しく口を動かしていた。

その様子が可愛くて眺めていると、目が合った途端、彼女は視線を下に向けてしまった。

しかし、貴嶺が好物の椎茸をとっておいだところ、彼女は嫌いなものをよけていると勘違いしたようで、声をかけられた。

「私、椎茸が好きなんですよね。でも人参は嫌いで」

本当は、貴嶺も好きなのだが、彼女はとても食べたそうにしている。

「……食べます？」

そう言うと、彼女の目が嬉しそうに輝いた。椎茸ごときで、ずいふんと嬉しそうな顔をする。

貴嶺にとつて純奈のファーストインプレッションは、目が丸く大きいこと、食べ方が気持ちいいこと、そして可愛い人だということだった。

その後、姉の雪嶺と一緒に会場を出た貴嶺は、すでに呼んであったタクシーに乗り込む。すると、隣に座った雪嶺が肘でつついてきた。

「貴嶺、味が染みた椎茸、好きじゃなかった？」

いたずらっぽいわなを浮かべて聞いてきたので、そのまま答えた。

「好きだよ」

「じゃあ、なんであの子、純奈ちゃんにあげたの？」

「物欲しそうだったから」

何の期待をしていたのか、姉はがっかりした目を向けてくる。今日初めて会った相手と、何が起るわけもないだろうに。

「……あつそ。可愛い子だったしい、珍しく貴嶺が気に入ったのかなあと思ったのにー」

嫌みっちらしく言うのを聞きながら、貴嶺は眼鏡を押し上げる。

「でも、貴嶺が女の子とあんなに長く話してるの、初めて見たかも」

「そうかな？」

「ハトコって、結婚できるよね？」

そんな姉の言葉を、ただの冗談だろうと笑って流した。

「とにかく、元気で日本に帰って来てよ？」

「わかった」

そう答えると、雪嶺はそこで降りしてくださいと言ってタクシーを降りた。

二千元を置いて手を振る雪嶺に、貴嶺も手を振る。

「次はどちらですか？」

「外務省へお願いします」

貴嶺は後部座席に深く背を預けて目を閉じ、純奈の顔を思い出す。知らず笑みが浮かんでいた。

また会うことがあるだろうか。

そんなことを考えながら、貴嶺はほんの少しだけ眠った。

☆ ★ ☆

二度目の出会いは偶然だった。

異動先の、松尾という人懐っこい男に飲み込まれ、待ち合わせたバーになぜか彼女が現れたのだ。お互い驚いたが、聞くと松尾の中学の同級生なのだという。

世間の狭さに驚いた。

純奈は、こうした店に慣れていないのか、どこか居心地悪そうにしている。

そんな彼女の戸惑うような仕草が可愛らしくて、悪いと思いつつ口元が緩んでしまった。

見ていると、純奈は素直で可愛い人らしい。くるくると変わる表情に、気付けば目を奪われていた。しかし、貴嶺が話しかけるたびに、純奈は黙って俯いてしまう。

どうしたらいいのだろうと思った。

「純奈、新生さんがイケメンだから気後れしてんのか？」

すると横から、松尾が茶化すように言った。

「そ、そうよ！」

純奈は、頬を赤く染めながら力いっぱい肯定する。

その反応が可愛くて、思わず唇に笑みを浮かべてしまった。

「お葬式のすぐ後からお仕事で、大変でしたよね？ お疲れでしょう？」

不意に純奈から仕事のことを振られて、口下手な貴嶺は、とっさに答えを用意できなかった。

「いえ、仕事は、すぐ済みましたから」

そっけない言い方だったかもしれない、と反省しつつ内心ため息をつく。次に話しかけられたら、どう返事をしようかと、ウイスキーを飲みながら考えた。

「お仕事できるんですね、隆介の言った通り」

「いえ、そんなことはありません」

純奈は貴嶺の言葉に何度か瞬きをして、ちよつと俯いた。

また失敗したか、と頭を抱えたい気持ちで琥珀色の液体を揺らす。純奈には、もつと優しい言い

方を用意すべきだった。

「新生さん、仕事できるじゃないですか」

松尾の気遣いと明るさにほつとしつつ、ただ首を横に振る。本当に、自分が仕事ができると思っただけではないのだ。

「ただこなしているだけだから」

「そうやって、こなせるのが凄いですよ。俺、尊敬しますよ！」

褒め上手だな、と思いつながらウイスキーを飲み干した。

飲んだ後、純奈のグラスが空なのに気付く。

「何か飲みます？」

「え？ あ、いえ！ さつき一気に飲んだので、もう少しいいです」

スープやガーリックトーストも食べていたし、もうお腹がいっぱいなかもしれない。

「そうですか」

「新生さんは？ 何か飲まれないんですか？」

軽く小首を傾げて聞いてくる仕草を、可愛いと思った。自然で、凄く好感が持てた。

普段なら、女性のこういう仕草は敬遠するところなのに、可愛いと思うとは。今日の自分はどこかおかしいのかもしれない。

「そうですね……じゃあ、ウイスキーで」

並んでいる酒瓶を一通り見た貴嶺は、一本の酒瓶に目を留めた。

「エドドラダワーをストレートでください」

ほどなくして、ストレートで置かれたウイスキー。それを一口飲むと、純奈がじつところらを見ていることに気付く。

「どうしました？」

大きな目でじつと見られると、なんだか心が落ち着かない。

「いえ、それ美味しいのかな、って。ウイスキー、飲んだことないので」

ウイスキーを見ていたのか、と若干残念な気持ちがあることに貴嶺は驚いていた。

「ああ……じゃあ、次は……」

純奈でも飲みやすそうなウイスキーは、と考えつつ自分の感情に戸惑う。

「いえ、ちよつとでいいんです……味見してみたいな、って思っただけです」

貴嶺のウイスキーを見ながら言われ、手の中にあるウイスキーグラスを揺らす。

「これ、ですか？」

「はい……。あの、ダメですか？」

にこりと笑う唇。彼女は何を考えているのだろうか、と思う。

純奈とはこの前知り合ったばかりで、会うのは今日で二度目だ。

親戚だから気安く思ったのか、それとも何か特別な意味でもあるのか……

「どうぞ」

彼女の言葉の真意が測れないままに、貴嶺はグラスを純奈に渡す。

すると彼女は貴嶺が口をつけた酒を飲んだ。それが好意の表れなのか、なんなのか。まったく見当がつかない。

「うあ……っ！」

純奈から視線を外して考え込んでいた貴嶺は、純奈の声でハッとする。

「ばっかだなあ、純奈。いきなり飲むからだよ。マスター水ください」

舌を出している純奈を見るに、どうやら何も考えずウイスキーを飲んだようだ。グラスの中身が結構減っている。

すかさず水を頼む松尾を見て、なぜか後れを取った気分になった。

純奈のことは自分が、と思う貴嶺がいる。

「ありがとう、隆介」

ひとしきり水を飲んだ純奈は、ほっとしたように息をついた。

「純奈、甘い酒好きじゃん。急にどうした？ ウイスキー飲みたいなんて」

「え？ だって、新生さんが、美味しそうに飲んでるから……」

自分を見上げてくる純奈に、これは好意以外のなんだろうと考える。

「ウイスキーは、ゆっくり飲むのが美味しいんです」

「あ、でも、なんか凄く甘い匂い、っていうか……後味が、いい感じ？」

貴嶺が言うのと、純奈は何かに気が付いたように目を丸くする。

「ウイスキーは、そういうところを楽しみます」

そうなんだ、と素直そうな目が向けられた。

貴嶺は知らず口元に笑みを浮かべながら、その表情を見ていたのだが……

「す、すみません、グラスに口紅がつ！」

いきなり純奈が謝り、グラスに手を伸ばしてきた。グラスには純奈の口紅がすっかりついていて、そのピンク色の痕跡あとを見て、心がまた落ち着かなくなった。

貴嶺のグラスについた口紅を指で拭ぬぐうのもまた、なんだか思わせぶりな行為に感じてしまって、そんな捉え方をする自分に戸惑とまどう。

「……いえ」

内心の動揺を抑えて気にしていないと伝えるが、純奈は顔を赤くして下を向いてしまった。

もしかして言い方が冷たかったのだろうか。そっと純奈の様子を窺うかがおうとすると、肩に寄りかかってくる。明らかに、心臓が音を立てて跳ねた。

「す、すみません」

純奈はすぐに謝って、パツと身体を離れた。

貴嶺は何度も落ち着け、と自分に言い聞かせる。だが、どこか期待している自分がいる。

「大丈夫ですか？ 顔が赤い」

平静を装いながら、赤くなった彼女の頬を親指でそっと撫でた。

「あの、ちよっと、トイレに行ってください」

彼女は赤い顔のまま、バッグを持って席を立った。

「すみません、新生さん。あいつ、新生さんの酒を飲んでしまつて……そういえば、さつき、なん
で謝ってたんですか？ 純奈」

「……ああ、少し酔ったみたいで、肩に寄りかかれてね。悪いと思っただんじゃないかな」
「そうですか」

酔っただけ。きつとそうだ。もう一度自分に言い聞かせて、グラスの酒を飲もうとした。しかし、
純奈が口をつけたものだと思うと、なぜか心臓が騒ぐ。

恋をしたての十代じゃあるまいし、と酒を呷すすった。

しばらく酒を飲んでみると、松尾が先程の会話の続きを口にする。

「酒は弱くないんですけどね、純奈」

「そう。弱くない、か。ウイスキーは初めてだったからかな」

「そうでしょうね……っていうか、遅いですね。本当に酔ったのかな？」

うーん、と言いながらトイレの方向を見る松尾に、空からのグラスを置いて言う。

「見てくるよ」

「あ、いいですよ！ 俺が……」

「酒を飲ませたのは俺だから。松尾君は座っていていい」

手で制して、立ち上がってトイレの方向へ向かう。

すると純奈は、俯うつむきながら背をトイレのドアに預けていた。

「純奈さん？」

気分が悪いのかと思つて声をかけると、彼女はハッと気付いたようにこちらを見た。

「あ、に、新生さん!？」

慌ててドアに預けていた背を起こしたからか、純奈の身体が不自然に前に倒れてきた。

「わあっ!？」

「純奈さん!」

倒れ込んできた身体を抱き留める。ほつとして、息を吐くと、純奈の肌が近くににあった。

そこから薄らと甘い香りがする。同時に抱き留めた身体の柔らかさを意識して、貴嶺は息を詰めた。

彼女の胸が、貴嶺の腕と肋骨のあたりに当たっている。

純奈は腕も細く、割と華奢らしい。けれど当たっている胸はかなり大きい。

純奈はバランスを崩したまま上手く立てないようで、すがるみたいに貴嶺の腕を掴んでくる。

純奈の柔らかさや香りをより近くに感じてしまい、堪らない気持ちになった。

貴嶺の目の前には、純奈の形のいい耳と薄らと色づく細い首。気付けば顔を寄せ、彼女の首筋へ

唇を這わせていた――

「す、すみません!」

焦った純奈の声に、ハッと瞬きをする。慌てて身体を離す彼女に、一気に理性を取り戻した。

幸いにも、唇を這わせたのには、気付かれていないようだ。

「……いえ、大丈夫ですか?」

いつの時も、貴嶺は冷静で表情が乏しいと言われる。それは自分の長所であり短所でもあるが、

今は長所として働いたようだ。そのまま冷静な声で声をかける。

「はっ! はい! だ、大丈夫、です」

「なかなか帰つてこないから、心配しました」

肩を支えると、純奈は申し訳なきように俯く。その様子を見る限り、彼女には思わせぶりな態度

を取ったつもりなど欠片もないのだろう。なのに貴嶺は、そんな彼女にぐらついてしまった。それ

こそ、一瞬、理性が飛んでしまうくらいに。

「マスターが水を用意してくれています。戻りましょう」

「は、はい」

「足は、平気ですか?」

上手く立てなかった様子なので尋ねると、力一杯返事をされる。

「大丈夫です!」

彼女はそう言つて一人で歩いて席に戻つて行つてしまう。

純奈は用意してあった水を一気に飲み干すと、赤い顔のまま立ち上がった。そして財布を取り出し、三千円をテーブルに置く。

「あの、隆介、えっと、酔つたみたいだから帰るね! あの、新生さんも、すみませんでした!」

「え、おい、純奈?」

いきなりのことで、声を掛けることもできなかった。とっさに椅子から立ち上がるものの、そのまま彼女の背中を見送ることしかできない。

「きちんと帰れるかな？」

いろいろと悪いことをしてしまった気分になった。

「純奈ですか？ 大丈夫ですよ。純奈は自分の限界知ってますから。きっと、バーの雰囲気酔ったんじゃないですかね」

「だったら、いいけど。松尾君は、純奈さんとずっと友達？」

「ええ。中学の時からずっとですね。純奈は真面目まじめでさっぱりした性格なんで、昔から付き合いやすいんです。でも、なぜかずーっと、彼氏いないんですよね」

松尾は笑いながらそう言っつて、一気に残りのウイスキーを啣あった。

それはさすがに嘘だろう。いくらなんでも、あの純奈がずっとフリーだったとは思えない。葬式の後、確か母が、一月に二十七歳になったばかりだと言っていた。

「男にも人気があったし、顔も結構可愛いんですけどね。純奈はあんまり男に興味ないみたいで。だから、友達以外の男がいると、キョドるんですよ」

「キョドる？」

「はい。純奈の態度、ちよつと変だったでしょ？ 新生さんに女扱めいされて、挙動不審になったんですよ、きっと」

「そうなのかな」

酒を飲みながら、先ほどまで一緒だった純奈を思い出した。

久しぶりに女性に対して自ら興味を持ち、好ましいと思った。

というより、出会ってからこんなに短期間で好ましいと思える女性は初めてだった。

だが、もう会うことはないだろう。自分は仕事が忙しいし、連絡先さえ交換していない。

きっと、これで最後。

自分でそう心を整理しながら、ウイスキーのお代わりを頼む。

でも、もし三度目があつたら――

心のどこかでそれを願って、貴嶺は新しいウイスキーを飲むのだった。

☆ ★ ☆

見合いの話は突然だった。

本省で書類仕事をしている時に母から着信があった。何事かと思い昼休みに電話をかけると、開口一番に、お見合いをして欲しいと言われた。

「は？」

『だから、お見合い。早い方がいいんだけど、いつなら大丈夫なの？ 貴嶺』

「そんなの、する気ないけど」

今は、恋愛や出合いを求めてはいなかった。この間、珍しく心が動いたけれど、きっと純奈とももう会わないだろうと思っっている。それなら最初から求めない方がいい。

『相手方には、このお話を進めてもらってるの。お母さんの顔を立てると思っつて、会うだけ会っつて

くれない?」

「顔を、立てる?」

『向こうが乗り気なのよ。相手のお嬢さんは家事手伝いをしていて、結婚したら専業主婦ができる人。貴嶺、忙しいから、家にいてくれる人がいいでしょ? それに、もし転勤となったら、ついて来てくれる人がいいじゃない?』

「乗り気って……」

頭痛を感じて目を閉じる。それから眼鏡を押し上げ、ため息をついた。

「断ってくれない?」

『ダメ、断れないの! だって、相手の親御さんに、こっちは日付けさえ合えば大丈夫って伝えちゃったもの!』

親というのはなんて勝手なんだろう。そう思っただけで、貴嶺はまたため息をつく。

「……スケジュール、確認する。こっちの予定に合わせて貰^{もら}っても大丈夫?」

『もちろんよ! ありがとうね、貴嶺!』

母は、言うだけ言うと言話を切った。

こんな強引な母は初めてだが、気持ちにはわからないでもない。

気持ちも落ち着かせてスケジュールを確認すると、二日後の昼間しか予定が空いていないことがわかった。重いため息をつきながら、貴嶺は母親に連絡する。

結婚は、縁があったらと思っていた。

その縁が、まさか会ったばかりの二従妹^{はとこ}へ繋がっているとは、この時の貴嶺は考えもしなかった。だけど、見合いの席にいた彼女を見た瞬間、この縁を大事にしたいと思ったのだ。

3

『結婚を考えるには、良い縁かと』

そう言ったのは、新生貴嶺という美形の代名詞のような人。よく見ると、目の下に小さな黒子^{ほくろ}があった。彼のかけている黒縁眼鏡は野暮ったく見え、とても似合っている。

「あとは二人で話して来たらどうかしら? ねえ、秋絵さん」

「そうねえ。庭に出て、お話でもねえ」

本格的に見合いつづくなってきた。ちらりと貴嶺を見上げると、表情が少し柔らかくなったような気がした。

「庭に出ますか?」

「あ、ええ、はい」

慌^{あわ}てて立ち上がると、貴嶺が見上げてきた。

「寒いですよ?」